No. 48　（グランドビジョン⑦）

アディクション学の創成および発展

①　ビジョンの概要

医学的・社会的に深刻な問題を惹起するとともに個人や社会に役立つこともあるアディクションを対象とした「アディクション学」を創成し、功罪両面の状況および原理を解明して、対策法・活用法を確立する。

②　ビジョンの内容

アディクションは、薬物やアルコールなどの物質の使用をやめられなくなる物質依存とゲームやギャンブルなど特定の行動をやめられなくなる行動嗜癖を含めた概念である。アディクションは、人類の歴史とともに医学的問題と社会問題を惹起してきた。一方、適度に物事にのめり込むことで、大事を成したり生活の質を上げたりすることもある。物事にのめり込む現象であるアディクションを総合的に理解し、制御するための研究、すなわち「アディクションを知る、創る、超えるための学術」が必要である。アディクションは脳における分子・細胞レベルの現象であり様々な心身の疾病と関連する。また、アディクションを作り出す情報や装置（工学）、自由と規制など社会システムのあり方、行動経済学などとも関係する。文化や遺伝子配列の多様性も影響することから、国際連携とともに国ごと個人ごとの調査・研究も必要である。学術研究構想により、アディクションの功罪両面を分子科学レベルから社会科学レベルまで多階層的に明らかにして社会応用するアディクション学の創成が期待される。

③　学術研究構想の名称

アディクション研究拠点形成によるアディクション学の創成

④　学術研究構想の概要

アディクションを研究対象として、多くの関係機関との連携ハブとなり学際的かつ総合的研究を推進する拠点を形成することで、「アディクション学」を創成する。拠点としては、国立精神・神経医療研究センター（NCNP）内に新設されるアディクション研究センターを拡充して充てる。精神医学、薬理学、毒性学、ゲノム科学、疫学、心理学、看護学、リエゾン学、法学、社会学、教育学、経済学などの研究部門・研究室を設置するとともに、事務局内に他機関連携推進部署を設置し専門家を配属する。NCNP 内の施設や制度との連携体制を構築するとともに、国内外の関連機関と連携協定を締結して、共同研究・支援研究を推進し、人材育成を図る（図１）。

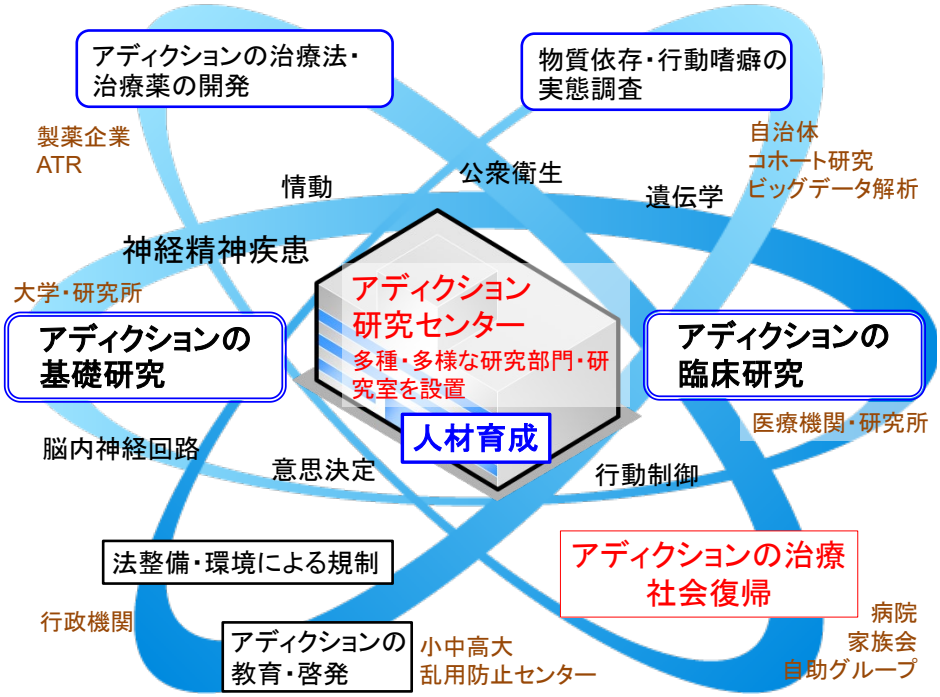

図１　アディクション研究拠点形成の構想

⑤　学術的な意義

アディクションの研究・対策の必要性がうたわれているが、実態調査は不充分であり、実質的な対応はまだほとんどなされていない。多様化するアディクションに国として対応していく上で、包括的な研究・教育・治療体制を整備することが必要である。アディクションには個人の脳という問題に加えて、人としての生き方、社会とのかかわり、特に教育とのかかわりが重要である。したがって、アディクションに関する医学・生物学的研究のみならず、哲学、法曹、教育学分野の関係者との連携の構築・拡充が急務である。アディクションを正しく理解し、適切な防止策や治療・改善方法を確立するために、物質依存と行動嗜癖を包括的に取り扱い、分野・領域を横断したアディクション研究が必要である。

本構想は、アディクション研究拠点を拡充させることで、関係機関との連携を強化して、学際的な新たな

学術分野である「アディクション学」を創成するものであり、学術的価値は高い。異分野融合による統合知によって初めて効果的に学術分野を創成できる。社会ニーズの高いテーマであることから、応用的な学術領域としての価値が高く、一方、動物の根源的な行動制御機構ともかかわるものであり、理学的価値も高いと考えられる。また期待される成果は、法学、教育学、社会学、経済学、情報工学などに波及する効果を持つものである（図２）。

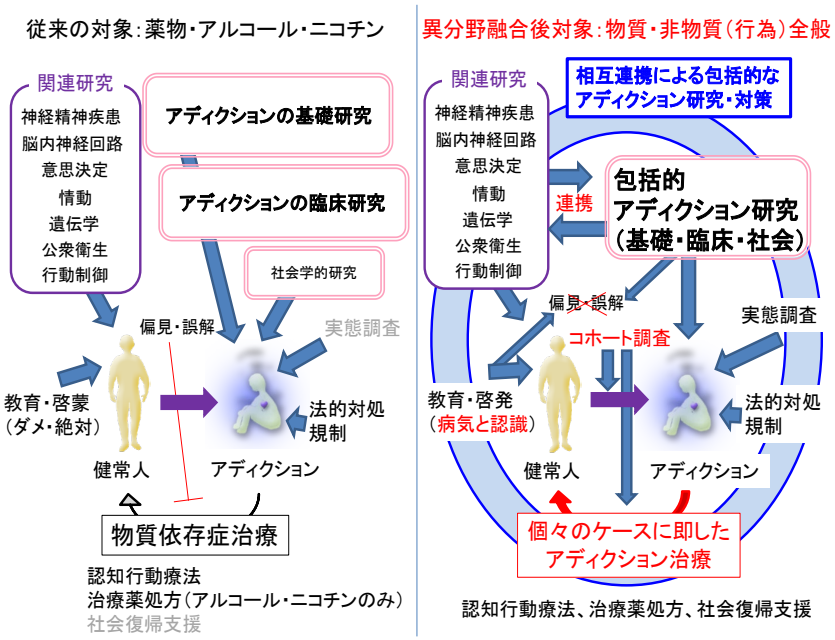

図２　アディクション学創成による異分野融合的問題対策

⑥　国内外の研究動向と当該構想の位置付け

欧米においてはアディクションを専門に行う研究機関・研究所が存在するのに対して、日本においては日本学術会議の提言を基にようやく小規模なアディクション研究センターが設置準備段階となった。このため、日本におけるアディクション研究者は、互いに連携して情報共有・共同研究などを進めてはいるが、予算不足や所属機関同士でのシステムの違いなどにより、国民にとって意義のある有機的連携は行えていない。本構想では、物質依存と行動嗜癖を包括的に取り扱い、分野・領域を横断したアディクション研究が行えるような体制・研究機関の設立・拡充を提言する。特に、多様性のある行動嗜癖に関する研究は、世界的に見ても未だ限られており、いち早く日本が本格的に取り組むことにより、本分野を先導することが可能となる。

⑦　社会的価値

大麻使用、ゲーム障害など、アディクション問題への国民の関心は極めて高い。一方、アディクション患者への偏見も強く、研究者や医療従事者も含めた国民の理解が深まる必要がある。アディクションは医学的、社会学的、その他の学術分野においても重要であり、アディクション学の知的価値は高い。また、多くの依存性物質が治療薬として医療現場で活用されており、ギャンブルやゲームにはレクリエーションとしての価値があり、e スポーツなど新産業も生まれていることから、経済的・産業的価値も高い。アディクションは、WHO が定める SDG 時代の健康での 17 項目に“Strengthen the prevention and treatment of substance abuse, including narcotic drug abuse and harmful use of alcohol”として明記されており、アディクション問題への適切な対応は SDGs へ貢献するものである。

⑧　実施計画等について

【実施計画・スケジュール】

R５-R９：アディクション研究センターの設立。建屋の建設と設備・装置の整備。国内外の連携機関との協定締結。連携機関との共同研究、セミナー等の定期的開催の開始。人材育成プログラムの構築と開始。

R10-R13：研究センターの拡充。設備・装置の再整備。国内外連携機関との共同研究の拡充・整理。

R14-R17：研究センターとその連携体制によるアディクション学の確立と先導。国内外の連携機関との共同研究の拡充・整理。産学連携の拡充。社会実装の重点化。

【実施機関と実施体制】　国立精神・神経医療研究センター(NCNP)内に設立されるアディクション研究センターを拠点として、既存の研究・医療機関および関連団体や関連企業との連携体制を構築する（図１）。

【所要経費】　総額 410 億円

建設費　：200 億円　（建屋（通常設備・什器含む）：100 億円、情報システム設備：40 億円、動物実験設備：30 億円、実験装置：30 億円）

10 年間の運営費(研究費を除く)：210 億円　（人件費：160 億円、施設維持費：50 億円）

⑨　連絡先　池田　和隆（東京都医学総合研究所）